

歩を實行し得しめたる事實、手足を全く缺ける者に頭の運動にてタイプライターの術を學ばしめて成功せる事實、盲にして啞聾を兼ねたる憐しき廢疾者を教へて、指を他人の口唇に觸れて談話し得しめたる事實あり。

されどアメリカインディアンの教育殊に黒人の教育は北方にては白人と差別なきも南方にては全然白人と學校を異にし、自由平等の精神に合致せざるに似たり。

(三) 學校教育の實際的職業的傾向は豫想外の進歩を認むべく、主義として、何時か役に立つべきが故に教ゆるが如き、同一教材を重複して授くるが如きは最も排忌せらる。學校には大抵實際に職業を授くる設備完全し、一校六乃至八の分科を置き、兒童生徒は各其好む處に就きて或は左官或は運轉手或は洗濯等の實地練習を行ふ。故に彼等の工夫力、創造的精神は頗る旺盛にて、現に余の滯留中も一兒童が化學上の重要な發明をなしたる事を聞知せり。

(四) 個性の發展に注意し學級の人員最も多きも四十を越えず或は之を二分若くは三分して個別に教育し、殊に實驗は十二人を限度とす。形式的又は劃一的教育は殊に排斥し、試験の如きも一二科目の缺點は更に之を補習せしむるに止め落第せしめざるが常なり。

(五) 學校と社會教育との連係巧妙を極め講堂は常に公會の用に供し、市民は自由に之れに出入して、備付の用具例へば運動具又は洗濯場を自由に使用するのみならず、教師は時に懇切に其使用方法等を説示するが如き例多し。

(六) 兒童は六、七、八、九歳の間に入學する例多く、州及び學校により同しからず。小學校は八年より六年に短縮され中學校は四年より六年に延長せられ却て好結果を見つゝあり。

氏は更に、米國教授法の特徴を述べ、教科書の内容に言及し、國語問題の輕視すべからざることを力説し、幾多研究の材料を提供し、更に座談に移り、一問一答歡を盡して十時散會せり。

新著紹介

無門關解釋

文學士 紀 半 正 美 著

單傳の佛心、即ち不傳の一著子は永恒に不變である、過去は釋迦未生前より、未來は彌勒成道の後に至るまで、一點の増減もない、上天國の寶座より、下地獄の大釜のどん底まで、一貫して嚴然として宇宙間に獨露して居る、直きにこの佛心を指し箇中に躍入せしむるのが禪宗である、それでこの佛心が即ち宗である、この佛心以外に宗はない、然しながらこの佛心は證して始めて得らるべきものではない、又釋迦の成道によつて始めて生れたものでもない、三世不可得、不生不滅である、森羅萬象、山河天地、衆生佛、皆一心に朝宗し、諸法實相なる宗である、物如即現象なるの宗である、煩惱即涅槃なるの宗である、絕對唯一世界の宗である、西天の四七、東土の二三、脈々相承すと雖も佛心は一體であつて、佛を超え祖を越え、佛を殺し祖を殺し、時間上或は空間上

その間髪を容るる程の隔て差別もないのである、それ故こゝに於ては誰の禪、彼の禪といふやうな別はない、幾千年の過去を今一瞬に引き戻して釋迦と相見し、幾十億歳の未來を現刹那に縮め來つて彌勒を拜招し、數千里を目前に現じて少室面壁の達磨に參じ千百の佛祖と唇を交へて相語ることもできるのである、加之一切事物を自己に返照して萬物を創造し、或は一切事物に自己を返照して一點の自己をも止むることなきに至ることもできるのである、一切を否定して自己のみ存すとなし、或は自己を否定して萬物獨り在るとする如きは何れも相對の見といはねばならぬ、或は主たり、或は客たり、或は精神たり、或は物質たり、遊戯三昧であつて、所謂、應無所住而生其心である、これが即ち隨處主となるの端的である、若し何處かに主を存すればこれは既に隨處に主となるといふことにはならぬのである、隨處主客なきところ、能動所動なきところを假りに名けて隨處に主となると云ふのである、趙州の無字及び白隱の隻手音聲も皆この端的である、趙州によつて始めて無字あり、白隱あつて始めて隻手音聲があるのではない、これは趙州、白隱の本來の面目であるのみならず、達磨の當體である、又この公案透過して始めてこれあるのではない、透關の前、透關の後、即ち、悟前、悟後、毫頭の差別なきをしかいふのである、大道無門の仔細はここに存するのである、この故に釋尊をして其の成道の曉に於て「奇哉！」と叫ばしめたのである、釋尊六年の修行は一片の衆生に回向するところはなかつたのである、もとの如く柳は綠、花は紅にて何の變つたこともなく、何の役にも立たなかつた、無功德であつた、無駄骨折りになることが

禪宗の最も尊しとすることである、これあらんが爲に刻苦勉強、勇猛精進して喪身失命を辭せぬのである、禪宗は實に馬鹿馬鹿しい宗旨である、著者の如き伶俐な人の入るべき宗旨ではない、もつともつと鈍物がよいのである、鈍いメスを持つ人よりは、鈍い斧の持手が適當である、肉を折いて母に還し、骨を折つて父に還す底の荒療治は斧がよいであらう、それは兎も角として、その佛心とは何であらうか、趙州の無字、白隱の隻手音聲とは何ものであらうか、若しこれを眞に體得せなかつたならば一切の事皆妄想であり、凡ての言句は悉く曠語である、八萬の法門を知ると雖も依草附木の精靈である、釋迦も四十九年の間、横説豎説到らざるなく、自由自在に文字を立てたのであるが、而も一字不説、不立文字と唱へ、特にその不立文字の一著子、涅槃好心正法眼藏をば摩訶迦葉に附囑した、説いて説かぬ場合があり、立てゝ立てぬ揚合がある、これが教外別傳である、教内のことは皆教外に歸するのである、もとより教内、教外の別あるのではないが、そのなきところを假りに名けて教外といふのである、教内のことは外道もよくこれを語り、魔道もよくこれを現するのである、凡そ口あり、又少しく理解力あるものならば、佛とか、絕對者とか神とかいふやうな語、或は心身統一とか、物心一如とか、絕對即相對とか、主客合一とか、自他合一とかいふやうな語を用ゐる又は抽象的に解釋することのできぬやうなものはないであらう、この頃いかゞはしい邪教すら、その教義にかゝる語句を用ゐて邪を文らんとして居る、しかしこの語句によつて邪教が正教になる筈はないのである、たとへば佛教と異るところなしといふも、そはにせ佛教であ

る、又たとへ佛の經を讀み、口、佛敎を説くといへども、敎外のことを眞に體得せなかつたならば、それは眞の佛徒といふことはできぬのである、敎内のことは單に名に過ぎぬこととなり、死物となるのである、恰も龍を畫いて眼睛を點ぜぬやうなものである、敎外に即して始めて敎内のことが生命を得來るのである、外道と佛法との別るところはこの敎外にある、こゝに佛法の精髓があるのである、禪宗はこの敎外を宗とするのである、禪宗の他宗に勝れて居る所以はこゝにあるのである、それであるから古來具眼の祖師は皆この敎外を以て第一義とするのである、他力門に於ても蓮如の如きは八萬の法藏を知るといふとも後世を知らざるを愚者とし、たとひ一文不知の尼入道なりといふとも後世を知るを知者とす」といふ語を引用して同行の人を戒めて居る、こゝにいふ後世とは敎外のことであらねばならぬのである、禪宗の祖師皆この敎外の一顆明珠を別傳するが爲に時及機に應じて婆心を垂れて居る、公案の源こゝにあるのである、世人多く敎内、説心、説性の文字を知解して、これを以て佛法なり、正知見なり、と憶測し、或は有無の會をなし、或は虛無の會をなすから、それはなされて敎外本分の田地に直入せしむるが爲に下したる婆心が公案である、然るに世人尙もこの公案古則の表面の言句に拘泥して、追言尋語を事とし、彼此と理窟にわたり眞に工夫をせず、折角の婆心を忘却するが故に更に公案の文字に滯らず、指す指をはなれて直きに月を證するに氣づかしめんが爲に宗匠各々その力によつて婆心を垂れ、笠上笠を重ねたのが評唱、齋語、下語、頌等である、然しながら宗匠がその人その人の腕力によつていかやうに

取扱はうとも公案の眞意義には少しの變化も及ぼさない、又及ぼす筈がないのである、即ち同相同見であるべきである、こゝには支那の禪の、日本の禪といふやうな差別はもとよりない筈である、然るに而もこれ等の評唱等に對して皮相の解釋を試みて、益々それが爲に荆棘裡に深入りするものがある、それ故齋語、頌等は却て參學者をまよはすものとして大悲は碧岩錄を火中に投じたのである、これは大悲の力であつて又親切なところである、雪竇の頌がつまらぬものであるから燒いたのではないのである、無門も古則の著語及頌をなして直下承當の婆心を垂れた、著者の無門關解釋はその序文によると、無門關に對して論理的の解釋を下して參禪辨道の者の便利をはからうとするものであるとのことである、その心ばせはまことに結構なことであると思ふ、吾々もかゝる必要を感じて居るものである、凡そ宗匠は參學者を導く法門には定相はない筈である。夫故に古來明眼の宗匠は佛典の研究は勿論のこと、廣くその當時行はれたる外敎を調べて、正邪を明かにしそれ等のものにも文句をかりて或は公案となし、或は著語、下語して誤つて會することなからんことにとめた、然るに現今の宗匠を見るに外敎の知識はさて置き、敎内佛典の知識さへもたぬ人がないでもないやうである、これは衆生濟度の上からいつて不便である、加之明治中年以來東洋從來の思想とは餘程趣を異にする西洋の哲學、宗教、科學といふやうなものが輸入されて、現代の人の頭を支配し、宗教、學術上の用語に於ても餘程變化してきたそれで宗匠が西洋思想を解せないといふことは師家の方からいへば、參學者説得上甚だ不便を感じるであらうし、又參學者の方か

びいへば導いて貰ふ上に於て迂遠な道を通らねばならぬことになり、尤もこれは助道、方便上のことであるから、若しその方便はなれなかつたらばその方便が却つてさまたげとなる、それで方便は絶対界に飛びこむの方便であることを忘れてならぬ、方便は方便をはなれしむる爲の方便である、それで本分上には何等關係はない、しかし方便上からいふと所謂現代的であることは必要なことである、それで祖録、古則の評唱に付てもそうである、この點に於て著者の要求の如きは尤もなことと思ふ、しかしこれは根本智に徹せしめる助道であるから、評唱者の方からいふと評唱の對象を明かに會得して居ることが第一の要件である、その要件を充した上で現代的に相應した正確なる評唱解釋をしたからといつても解釋は解釋であるから不傳の佛心、教外別傳の一著子には毫頭も觸れては居ないのである、それで表面正しい解釋ができたからといつてその評唱者が佛心を體得して居るといふことは決していへないのである、ましてその解釋さへも誤つて居るやうな評唱解釋者に至つてはいふまでもないのである、又聞くものゝ方からいふと、いかに正しい解釋を聞いてその解釋を理解したからといつて、それで佛法を解したといふことはできぬ、佛教の精髓はさういふ解釋の外である、いかに巧みに解釋をなし、又いかに多く解釋を聞いたところで、公案、古則の鐵酸醜には齒も立つことではない、一字不説、不立文字の妙處はつらのぞきもすることはできぬのである、それ明眼の師家は却つて容易に方便を垂れぬ、まして自分に見處なく勝手に誤れる解釋をなしてそれを以て佛法を得たりとなし公衆に示さんとする如きは思はざるの甚だしきものといはね

ばなるまい、宗教は永恒の要求である、最も眞劍なる、最も重大なる要求である、若し誤つて會せしむる如きことあらばこれは永恒の罪惡といはねばならぬ。

今著者の無門關解釋を見るにどうであらうか、嘗て本書公刊のことが哲學誌上にて豫告さるゝや、吾人大に囑望するところあつて、鶴首してその發行を待つた、此度、本書の京都哲學會に寄贈さるゝに當つて比評紹介を依頼され、本書を繕くにその序に於て十五分間の參禪もしたことはない、全くの門外漢であるといふ語を見て、余はひそかにこは恐く著者の賊機であらうと思つて總説及び本文をしらべ行くに及んで意外にも、この門外漢なる語が著者の正直なる告白であることを認むるに至つた、本書の目的は無門關四十八則及それに對する評唱及び頌を論理的に解釋してこの無門關をば參學者に體得せしめんとすることにあることはその序によるも明かである、然らば先づ著者自ら古則、著語及頌の眞意を會得して而して後これを解釋すべきが正當なる順序である、然るに著者は多くの古則、公案に付て全々無了解であるのは勿論のこと、無門の關がいかなるものであるかといふことさへも會得して居られぬ、吾々はいかにしてかゝる解釋を下して、これを序にあるやうな目的の下に公にする氣になられたかを了解するに苦しむものである、謂ふにこれは著者の自信に出づるものであらう、しかしこの自信は小さな己見である、かゝる己見を以て佛法を會し、公案を了解せやうとする如きは木によつて魚を求むるより尙不可能のことである、この己見が常に著者を禍して居るのである、先づこれをスツバリ放棄し無一物となり、大死一番することが必

要である、眞の自信は佛心である、佛自身の外にない、森羅萬象一切事物が自信することである、絶對を會せんとすれば一切の立場を棄て、無立場にならねばならぬ、道元禪師の學道用心集にも「參問宗師之時聞師說而勿同已見若同已見者不得師法也」「或一類已見爲先而披總卷記持一兩語以爲佛法後參明師宗匠聞法之時若同已見者爲是若不合舊意者爲非不知捨邪之方登歸正之道乎」とある、著者は已見を立て佛心を證せんとするのである、即ち已見によつて見性せんとするものである、かゝる方法にて幾萬言を費して公案を解釋したればとて夫は依然として已見である、相對的である、このことに付ては著者自ら參學者の爲に評唱すると稱して居らるゝ無門關第一則の着語を見れば一目瞭然たることである筈である、無門は著者の如き人あらんことを恐れて、こゝに於て先づ第一に則に對する態度を實に親切に示して居るのである、然るに著者は字句の末、言語の皮相に捕へられて無門の眞意を知らず、その親切を少しも氣付かず居られる、それで著者はかゝる解釋を試みるよりは先づ第一則の無字を提擧して、無味の鐵槌頭を縱横に咬着し、心路を窮めて之を絶し、識神を滅し、本分の田地に一超直入して、無限の眞味を味つて見ることが最も急務でなからうか、而して後味を語ることは自由である、美いといつても、まづいといつてもその一言の中に絶對者が全身を露出して居るのである、教内のことも生命を得て來るのである、而して方便が方便でなくなつて實相となるのである。

要するに著者のかゝる解釋は識者の笑を招かんことを恐るゝのみならず、著者の爲及び讀者の爲を思つても甚無益なことである、

或は自身を誤り、讀者を誤ることはないであらうか、しかし尤も本書は無門關解釋と正當によぶことはできぬ、何とならばこの解釋の對象は無門關ではない、著者は無門關の字句を媒介として、或る勝手なものを自ら手製して、それを解釋したものである、無門關とは没交渉である、このつもりで讀めば別に害がないかも知れぬ、兎に角本書の杜撰なことは著者が第五則の頌に於て無門が香嚴は杜撰であるといつて居るのを、無門が眞に杜撰であると思つて居つたと思つて居らるゝ程杜撰なものである、著者は余のこの紹介批評を以て或は獨斷であると思はるゝかも知らぬ、しかしそれは余の罪ではない、却つて著者の獨斷の罪である、著者は眞の獨斷に到ることによつて余が獨斷でない所以を明にせらるゝことであらうと思ふ、著者幸に余の眞意を汲むに吝ならぬことを乞ふ。發行所、岩波書店、定價金貳圓(久松眞一)

人間の進化

理學博士 石川千代松著

十九世紀後半の生物學並に一般思想界に驚天動地の變動を與へたものの一は生物進化の實證なりしこと殆ど言を俟たない。殊に思想界に向つて與へたる驚畏は、人間の進化の過程の實證より來つたものである。吾人が進化の事實を探りて、各生物の進化の過程を明にする時事々に盡きぬ興味を感するのであるが、特にその過程が人間の進化を指示する場合に於て興味は其頂點に達する。生物進化の一般につきての著作は已に數種も出版せられて居るが、特に人間の進化に就きて詳述したる著書の缺けたることば多年學界の遺憾として居た所である。